第3回 EFITA 報告

中村典裕

愛国学園大学 〒284-0005 千葉県四街道市四街道

第3回ヨーロッパ農業情報学会 EFITA(3rd European Conference of the European Federation for Information Technology in Agriculture, Food, and the Environment) は、EFITA を含む2つの学会とフォーラムと展示会が共催される形で、フランスのモンペリエ市で6月18日から20日の3日間にわたって開催された(<http://www.efita.org>)。

開催地のモンペリエ市は、フランス南部のラングドック・ルシロン州のモンペリエ県に属し、地中海に面した人口35万人の県庁所在地である。10世紀より中東との香辛料の取引により、かつては南フランスの中心的都市として栄え、この痕跡が凱旋門やポン・デュ・ガールをまねた水道橋などに残されている。また、この取引とともにもたらされた医学知識により1220年に医学校が創設され、この医学校、芸術学校、法律学校がニコラIV世の命令により1289年に統合・編成されたのが現在のモンペリエ大学の起源であり、モンペリエは学問の町としても有名である。その後、1970年にモンペリエ大学は学科に応じてⅠ～Ⅲの大学に分かれ現在に至っている。16世紀の宗教戦争で町の古い建物の多くは破壊されてしまったが、17世紀以降に再建された町は若者の活気であふれている。

また、ここにはアグロポリスという、農業研究都市(コンプレックス)があり、大学、エコール、国立および国際研究機関の本部や支部などをあわせて、18の機関が所在している。ここでは、地中海諸国、熱帯諸国の農業開発研究が中心課題で、生物多様性と環境、水資源管理と水不足への農業的対応、畜産と牧畜、食品工学と栄養などの分野で、学際的なプロジェクト、あるいはネットワーク研究がおこなわれている。代表的な機関は、ORSTOM(If Institute Francais de Recherche Scientifique pour le Developpement en Cooperation), CIRAD(Centre de Cooperation Internationale en Recherche Agronomique pour le Developpement), CNEARC(Centre National d'Etudes Agronomiques des Regions Chaudes), Cemagref(La Recherche pour l'Ingenierie de l'Agriculture et de

会場の lecorum

会場の lecorum

l'Environnement, Agricultural and environmental engineering research), INIBAP(International Network for Improvement of Banana and Plantain), 隔測研究所 (La Maison de la Teledetection), アグロポリス博物館 (<http://www.agropolis.fr/default.htm>) などである。Cemagref以外の機関の詳細については、京都大学荒木氏による「フランスとドイツにおける地域研究機関の視察とネットワーク形成」(<http://jambo.africa.kyoto-u.ac.jp/kyokan/araki/araki1.htm>)を参照されたい。また、Cemagrefに関しては英文ホームページ(<http://www.cemagref.fr/English/seven/words.htm>)が参考になる。

大会は、町の中心部にある賑やかなコメディー広場にほど近いLe Corumで行われた。大会の中心をなす2つの学会のうちの1つは、ここで紹介する農業、食糧生産、と環境保全における最新の情報・コミュニケーション技術を展望する第3回ヨーロッパ農業情報学会 (EFITA)であり、もう1つは精密農業の科学技術的発展を目指した学際的挑戦をテーマに掲げた第3回ヨーロッパ精密農業学会であった。さらに、これらの学会に加えて、第1回目となる農業・食糧生産・土地資源管理に関する専門家展示会およびフォーラム (The agroTIC 2001, First Professional Exhibition and Forum in France on ICT for Agriculture, Food Production, Land and Resources Managment)が併設されて今回の大会は運営された。また、この大会の前後にいくつかのオプション活動も準備されていたようである。これらの学会の性格が学際的であるため、スポンサーもフランス農業情報学会 (AFIA)、ヨーロッパ農業情報学会 (EFITA)、フランス農業工学会 (COFIRA)、ヨーロッパ農業工学会 (EurAgEng)、国際農業工学会 (CIGR)、および農学、園芸学、土壌科学関連の複数のフランス、ヨーロッパ、国際学会、国際自動制御学会 (IFAC)、複数のリモートセンシングとGIS関連国際学会など多岐に渡った。今回の大会だけでなく、その他の農業関連学会にも見られる特徴は農業現場に立脚したEUにおける農業への取り組みの真剣さであり、日本も大に見習うべきであろう。

さて、EFITAは2つの学会と展示会のすべてをまとめて紹介する開会セッションに続いて、10のセッションとポスターセッションが開始されたが、今回はヨーロッパでアジアパシフィック農業情報学会 (AFITA)の活動を紹介する意味で、アジアセッションを企画し発表を行った。今回のアジアセッションのタイトルは、「農業情報コミュニケーション技術に関するアジアからの報告: Asian Issues for Information Communication Technologies in Agriculture」であり、その

ホールでの総合討論

講演中の筆者

発表は6月18日の午前11時から12時40分まで行われた。演題は、当初

1. Spatial decision support system for rural land use planning
ADINARAYANA J., MAITRA S., VENKATARAMAN G.
2. Multilingual mailing list system for Japanese and Korean farmers
NAKAMURA N., TAKIGISHI S.
3. A study on internationalization of bonsai culture (miniature tree art) by the Internet
NAKANO K., NIHEI K., HUISMAN W.
4. IT use in Asian agriculture - Activities of AFITA and APAN/AG-WG
NINOMIYA S., HAHN W.S., MIZUSHIMA A., MACHIDA T.
5. IT & Internet prospects in the Japanese rural areas
SHIO K., TAZUKE A.
6. The strategy of applying electronic commerce of agriculture in Korea
YANG K. H., PARK S., MYOUNG K., SHIM K. S., LEE H.

が準備されていたが、実際に会場で発表が行われたのは、1, 6をのぞく4題で、演題番号4, 5, 3, 2の順に行われた。演題4は、茨城大学の町田氏、演題5は同じく茨城大学の塩氏、演題3は新潟大学の二瓶氏、そして演題2は筆者が発表を行った。それぞれの詳しい内容は紙面の都合でここでは省略するが、質問はそれぞれの演題の性格により大きく2つの方向に分かれた。アジア全体の話が中心となる演題4、日本と韓国との間の翻訳が話題となる演題2ではヨーロッパでの国際的感覚から連想される幅広い質問が多く出された一方、日本の話題に限定される演題5と演題3では日本のインターネット事情や盆栽事情に関する質問が寄せられていた。

すべての発表が日本からのコンテンツで占められたため、日本以外のアジア的な色彩が薄れ

モンペリエ市内

農業大学校で行われた懇親会

てしまったのは残念あった。また、日本関係の発表に限っても、現在農業情報化の中心となっている多様な内容が含まれていれば、より充実したセッションになったものと思われる。具体的には、産直WEBの現状、農業関連BtoB・BtoCの現状、などの紹介があれば望ましいと思われた。今後EFITAなどの国際会議で、アジアセッションを設ける際のセッションの性格付けの基本的スタンスに関して一考が望まれる。

当日配布された名簿には、2つの学会への参加者が混同して記載されていたため、日本からのEFITAへの正確な参加者数ははっきりしないが、十数名くらいと思われる。このほか、他のセッションやポスターセッションにおいても日本からいくつか発表が行われていたことを最後に報告しておく。